『保元物語』本文形成考

――源為朝と鬼の末裔との邂逅場面をめぐって――

佐藤　智広

はじめに

『保元物語』は、平安時代末期の保元の乱とその前後とを題材として、作品化させたものである。この『保元物語』諸伝本に、様々な書写態度の痕跡が窺える。しかも、ある伝本を規準として、諸伝本を比較した場合、僅かな記載内容の異なりのあるばかりではないことが認められる。可能な限り忠実に書写したとしても、そこに、誤写・誤脱・衍・若干の意改などは起こりうる。しかし、そうした差異とは明らかに異なるものが、諸伝本に見出されるのである。つまり書承段階の『保元物語』において、改作者の介在があったため、系統の異なる伝本（群）が成立し、その後、併存していったのである。

この『保元物語』は、巻末に源為朝の最期を載せるものが多く伝わっている。保元の乱の敗者中で、最も際立った剛の者として描かれる為朝の最期が、巻末に載せられるということは、作品研究の様々な点で考察されるところである。

為朝は遠流に処せられた後、鬼島に渡り、そこの住民と邂逅する。為朝の鬼島渡りの話を載せる諸伝本は、若干、解釈の揺れのあるものも含めて、鬼島の住民を鬼の末裔とする点でほぼ共通する。しかし、この邂逅場面の本文を比較すると、諸伝本に差異が見られ、改作の痕跡が窺えるのである。本稿では、系統の異なる伝本において、為朝と鬼の末裔との邂逅場面の本文を比較検討し、各系統本文の振れ幅、すなわち、書承段階での本文形成について考察することとする。

なお、こうした考察は、可能な限りの伝本を精査するべきであろうが、これまでの先学諸氏の御研究を勘案し、私の調査できた五系統[1]の本文について考察する。

第一節

『保元物語』において、源為朝の鬼島渡りの話が載せられるか否か、また、崇徳院崩御の話を含めて、巻末部分がどのように構成されるか、という点で、各系統には異なりがある。

為朝の、鬼の末裔との邂逅場面のみならず、鬼島渡りの話そのものがないのは、宝徳本系統である。宝徳本系統伝本には、鬼島渡りの章段を、別系統の伝本によって増補したものが複数ある。しかし、これらの伝本は、すべて、根津本系統の何らかの伝本から、この章段を取り込んだものであることが、犬井善壽氏[2]により論証されている。犬井氏御自身が〈『保元物語』としては、結果的に見て、性格が全く異なるわけである。〉と述べておられるように、巻末に至って、その性格が異なるものを同一系統と見做すわけである。しかし、それはあくまでも後の増補に過ぎず、また、増補に用いた伝本の系統が明らかにされている以上、宝徳本系統諸本は、為朝遠流の顛末を詳細に記そうという意識のない伝本から派生したもの、と言える。

宝徳本系統を除く四系統は、すべて物語の最終尾近くに、各系統それぞれの分量・進度で、為朝鬼島渡りの話を載せる。半井本系統を例に挙げると、以下のように話が展開する。

東国に流された為朝は、伊豆沖の諸島を所領するが、ある日、鳥の飛ぶのを見て、その行く手に未知の島があると推測、領土拡大のため船を漕ぎ

出す。案の定、島は存在し、為朝は上陸する。そこで為朝は、今まで見たことのない

其島ノ人ノ形チ、長ケ一丈余ナルガ、皆大童也。刀ヲバ右ノ脇ニゾ指タリケル。[1]

という者たちと出会う。

「我ニ不随ハ、皆射殺シテム」ト云ケレバ、「皆随候ベキ」由申ス。衣裳ハ網ノ様ナル太キ絹也。カヽル絹ヲ多ク取出シテ、為朝ガ前ニ積置タリ。「此島ニ名ハ無カ」ト云ヘバ、「鬼島」ト云。「汝等ハ鬼ニテ有カ」ト云ヘバ、「昔ハ鬼也シカ、今ハ末ニ成テ、鬼持ナル隠蓑、隠笠、ウチデノ履、シヅム履ト云物共モ、今ハ無ケレバ、他国ヘ渡ル事モセズ。其ニ随テ武キ心モ無」ト申ス。

為朝と島の住民との会話は、このようになっている。この部分について、他の系統の本文を見てみたい。

＊康豊本系統

「我に随ずは、か様に射害打害すべし。」とて、弓を引。差当たりければ、おぢわなゝきて、「順む。」と申。則、網の様なる絹を多取出して其前に積をきけり。「そも、此嶋に名はなきか。」と問ば、「鬼嶋。」と申。「さては鬼の有や。」と問ば、「昔は鬼にて有けれ共、今は末に成て、武き心もなし。」と申。[4]

＊版行本系統

「汝らもわれにしたがはずは、かくのごとく射ころすべし。」とのたまへば、みな平伏して随がひけり。身にきる物は、あみのごとくなる太布也。此布を面々の家々よりおほくもち出て前につみをきけり。嶋の名をとひ給へば、鬼が嶋と申。「しかれば、なんぢらは鬼の子孫歟。」「さん候。」「さてはきこゆるたからあらば、とりいだせよ。見ん。」とのたまへば、「昔まさしく鬼神なりし時は、かくれみの・かくれがさ・うかびぐつ・しづみぐつ・剣などいふ宝ありけり。其比は船なけれ共、他国へもわたりて、日食人の生贄をもとりけり。今は果報つきて、たからもうせ、かたちも人になりて、他国に行事もかなはず。」といふ。[5]

＊根津本系統

「やうれ、おのれらは何といふものぞ、なんぢが有様をかたり申せよ。」といふに、かれらがいふやう「我等はむかしのおにのする也。され共、今は世のするなれば、人をも食せず、たゞ此嶋を領して月日をおくる。」といふ。[6]

これらを見ると、為朝の出会った鬼の末裔らしき者は、作中時間の現在において、荒ぶるものではなくなったという点で共通している。今、〝鬼〟の定義は、本稿の意図するところではないので省略するが、例えば、身の丈一丈（『今昔物語集』巻一二一二八、巻一四－四三）という特徴を踏襲しながら、食人種（同、巻一七－四三、巻二七－八）といった性質はなくなっている。柔順で、あっさりと為朝に降伏するものとなっているのである。しかし、細かく検討すると、わずかなこの会話部分にも、単純な書写上の本文変化とは言えない差異が、認められる。これらの差異を、各系統の本文に則して考察する。

第二節

§1　半井本系統・康豊本系統・版行本系統

この三系統は、為朝と鬼の末裔との邂逅場面の展開は、ほぼ合致してい

る。しかし、宝の散佚という記事の有無で、半井本系統・版行本系統と康豊本系統とに二分できる。

まず、半井本系統本文と版行本系統本文とを比較すると、版行本系統本文の分量が、話の展開を変えない範囲において、増加していることがわかる。

版行本系統本文は、鬼の末裔が、宝の散佚を語る前に、為朝からの「さてはきこゆるたからあらば、とりいだせよ。見ん。」という問いがある。半井本系統本文の場合、為朝は住民に向かって「汝等ハ鬼ニテ有カ。」と問うのみで、宝のことは問いていない。そうした質問を承けて、住民は「昔ハ鬼也シカ、今ハ末ニ成テ、鬼持ナル……。」と答えるのである。版行本系統本文は、為朝の問いに対する必然として、この答えが発せられるのであるから、至って自然な会話の形になっている。それに対して、半井本系統本文は、住民の答える内容が唐突である。このことから、版行本系統は、半井本系統のように鬼の宝の散佚を載せる本文に、会話の展開を潤滑にするための為朝の問いを加えた形を採用したものと言える。逆に、版行本系統のような本文が省略されて、半井本系統のような本文が出来たとは、この部分については考えにくい。

展開を変えない範囲においての、このような増補は、他の部分にも見られる。

半井本系統本文では、為朝の問い「汝等ハ鬼ニテ有カ。」と、それに対する答え「昔ハ鬼也シカ、今ハ末ニ成テ」となっているが、その部分に該当する版行本系統本文は、「しかれば、なんぢらは鬼の子孫歟。」「さん候。」「さてはきこゆるたからあらば……」となっているのである。

両系統の本文は、島の住民によって、宝の散佚が語られる。しかし、半井本系統の場合、宝の散佚理由は「今ハ末ニ成テ」とあるのみであり、「末」が時間軸上の末（末世）を意味するのか、世代的な末（末裔）を意味するのか、厳密には不分明である。鬼一族に相伝されるべき宝が失われたのであるから、末裔と解釈してよさそうであるが、末世の意ではないという積極的な理由もないのである。それに対して、版行本系統本文は「鬼の子孫歟。」「さん候。」と明確にするのである。

半井本系統本文は、版行本系統本文へと、増加の方向で移行する。ただし、この二系統本文は、島の住民（鬼の末裔）が、鬼相伝の宝を散佚し、島を出ることもなく、猛々しい性質が失われていったという点で共通する。性質の変化は、宝の散佚が原因なのである。

一方、鬼の宝の散佚という部分を欠き、半井本系統本文と比較して、本文の分量が減少しているのが康豊本系統本文である。

昔ハ鬼也シカ、今ハ末ニ成テ、鬼持ナル隠蓑、隠笠、ウチデノ履、シヅム履ト云物共モ、今ハ無ケレバ、他国ヘ渡ル事モセズ。其ニ随テ武キ心モ無。

という、半井本系統本文の波線部分に該当する記述がなく、

昔は鬼にて有けれ共、今は末に成て武き心もなし。

とのみあるのである。半井本系統や版行本系統の本文が、猛々しい性質が消失した理由を、宝の散佚と結びつけるのに対し、康豊本系統本文の場合、その理由は「今は末に成て」とのみ語られる。そして、この「今は末に成て」は、半井本系統本文について前述したように、時間的な意味での末（末世）と世代的な意味での末（末裔）との、いずれにも解釈できるのである。

今一つ、看過できない点がある。

汝等ハ鬼ニテ有カ（半井本系統）

なんぢらは鬼の子孫歟（版行本系統）

おのれらは何といふものぞ、なんちが有様をかたり申せよ（根津本系

統）

という、疑問・命令は、為朝が相手の身上を問うものである。しかし、康豊本系統本文は、

　さては鬼の有や

というものになっている。半井本系統や版行本系統の為朝が、邂逅した眼前の住民を鬼の縁者と推測した上で問いを発することと異なり、康豊本系統の為朝は、この辺りの鬼の存否を問うのである。この三系統は、この為朝の問いの前に、島の住民が島名を「鬼島（半井本系統）」と説明する部分がある点で共通する。しかし、半井本系統や版行本系統の為朝と康豊本系統の為朝とは、眼前の住民に対する認識という点において隔たりがあるのである。また、根津本系統本文は、この為朝の発話の前に島名が語られない。よって、為朝の発話内容は他系統と異なっているが、眼前の住民の身上を問い質すという点で、半井本系統や版行本系統と共通している。

こうした為朝の問いに対して、住民は、昔は鬼であったが、と答える。これは四系統に共通する。そうして見ると、康豊本系統本文のみが、質疑応答に齟齬をきたしていることがわかるのである。康豊本系統本文によれば、為朝は、この辺に鬼が有るのかと問うに過ぎない。にもかかわらず、住民は自らの先祖について語り出すのである。

このように、康豊本系統本文は、未熟な会話の形を残している。先の、猛々しい性質の消失理由が不分明であること同様、邂逅場面は半井本系統本文と比較して、単に減少しているというに留まらず、曖昧で未熟なものと言えるのである。

§2　根津本系統

根津本系統本文は、この邂逅場面の展開において、他の三系統と大きく異なる。為朝の上陸した島の名前が、本稿で取り扱う部分の後になって、語り手が「鬼の嶋」と称することなども、その一例である。しかし、今ここで注目したいのは、鬼の末裔の発話が、

　我等はむかしのおにのすゑ也。されば共、今は世のすゑなれば、

とある部分である。

根津本系統本文は、鬼の末裔ということを述べながら、食人をせず、静かに島で暮す理由を、末世思想と関連する「世のすゑ」であるため、とする。各系統の本文に「末」「すゑ」ということばは用いられている。ところが、根津本系統のみが、「世のすゑ」すなわち、末世を意識した本文となっているのである。[7] 末世とは、『大集経』巻五五などを根拠として、釈迦入滅後二千年（一説には一千年）を経過すると、仏法は効力を失い、また荒廃し、それに伴った乱れた世の中になるという思想に基づく。そうした思想が、この部分に取り込まれているのである。

このことと関連付けて考えられるのが、為朝捕縛・遠流に先立って語られる、崇徳院の最期である。為朝と並ぶ敗者側の中心人物、崇徳院の最期は、『保元物語』諸系統に載っている。根津本系統は、為朝の最期の前にこれを載せるわけだが、この本文によれば、讃岐配流後、「来世の御ために」と崇徳院は、三年がかりで写経を行う。しかし、その経は都の帝に容れられず、「ねがはくは此大乗経を三悪道になげ入て、此力によりて、我日本大まろんとならむ」と誓い、「いきながら天狗のかたち」と語られるような非業の死を遂げるのである。

崇徳院の最期が語られる場面には、末の世といったことばは見られない。しかし、広く衆生を救うはずの大乗経典が拒絶された、すなわち、仏法の功力が失われたことは、末の世を表していると見てよい。そうした末法の世の中で、十善の君は天狗になり、鬼は人へと変化していくのである。

野中哲照氏[8]は、半井本をテクストとして、崇徳院と為朝とを（ソトカラオビヤカスモノ）と規定し、語り手にとっての現在を、古代末期の乱世と位置付けた読みを提示しておられる。これは、為朝渡島とその後を欠く宝徳本系統を除く各系統で、おおよそ同様のことが言えよう。そうした中で、改作者が、この巻末部を、「世のすゑ」ということばで、二人の敗者の話として収束させたものを、根津本系統は取り込んでいる、と看取できるのである。

また、原水民樹氏[9]は、根津本系統の本文の性格について、（数多くの不手際（それらの多くは、複数の異本の各々から記事を貪欲にかつ無雑作にとりこんだことに起因している）を有する一方、抄略や関連記事の集中化に典型的に読みとれるように、簡略化・整理化の方向を目ざすという、相反する性格を京図本はその内部に共有している。）と述べておられる。原水氏の論証は首肯すべき点が多いのであるが、とすれば、「世のすゑ」という収束は、どういった性格によるのであろうか。今、明確な答えを提示できるわけではないが、一つの振れ幅として、他系統との差異は明らかにできると言える。

§3　各系統本文の位相

根津本系統本文の改作の方向を明らかにしたことで、先の康豊本系統本文との関わりを検討したい。

康豊本系統の、この場面の本文は、他系統本文と比較して、未熟な表現であると言える。殊に、「末に成て」という部分は、二様の解釈を可能にする。これは、半井本系統本文と共通したものである。しかし、半井本系統本文が、鬼の末裔の性質の変化を、宝の散佚と関わらせることで処理したのと異なり、康豊本系統本文は、曖昧なままなのである。こうした曖昧な本文を伝える過程で、根津本系統本文のような、末世の出来事として収束させるという本文形成があったと考えられるのである。

一方、場面構成において、康豊本系統本文と類似する半井本系統本文であるが、半井本系統本文の形から、宝の散佚部分が省略されて、康豊本系統本文が生成されたとは考えにくい点がある。それは、康豊本系統本文において、為朝が、鬼の存在の有無を問いたのに対し、住民が、自らの先祖を鬼と答える点である。

為朝　さては鬼の有や。

住民　昔は鬼にて有けれ共……

という問答は、わずかではあるが、辻褄が合わない。半井本系統本文から、宝の散佚部分を省略したとしても、この部分の改変は理由が付けられないのである。むしろ、こうした未熟な点を整備し、鬼の末裔として明示していったのが、半井本系統のような本文なのであろう。半井本系統本文の本文形成については、鬼の宝の散佚譚を含めて検討すべきだが、[10]ひとまず、康豊本系統本文が、鬼の末裔の話として増補整備され、それが、半井本系統、さらには版行本系統の本文となっていったと見ておく。

半井本系統本文が、康豊本系統本文の後出と説いておられる高橋貞一氏[11]は、為朝の鬼島渡りの部分について、康豊本系統本文から半井本系統本文への簡略化を指摘しておられる。確かにそうした点が認められないわけではないが、本稿で扱ったような、増加の方向で整備されたと考えられる部分もあるのである。

おわりに

為朝と鬼の末裔との邂逅場面を通して、著作に関わる本文形成を考察してきた。鬼の末裔の発話は、本稿で扱う系統に限っても、三種に分類でき

る。要するに、ある段階での改作が二回は行われたということである。一者は〝末世〟という認識を持ち込み、『保元物語』巻末部を〝末世〟の時空間に起こった不思議として収束させている。今一者は、鬼の宝の散佚という理由付けを行うことで、鬼の末裔の性質の変化を説明している。前者は根津本系統に、後者は半井本系統や版行本系統に、それぞれ取り込まれている。どちらが、より大きな改変かと言えば、崇徳院の最期をも意識した根津本系統の本文である。また、半井本系統本文と版行本系統本文との差異は、場面構成を変えない範囲での増補、すなわち、小さな本文変化である。

源為朝の、鬼の末裔との邂逅の際にとった乱行ぶりについて、栃木孝惟氏[12]は〈物語の中心人物為朝に豊かな人間内容を賦与しようとする物語の意志から生まれる為朝像とは異なった、あらたな為朝の相貌にであう〉として、〈一人の人物の性格描写の割れ〉を指摘しておられる。また、麻原美子氏[13]は〈大島渡島後の悪行は、若年の頃の鎮西での濫行のやき直し〉として、〈その人間像は終始一貫していて統一されており、破綻はない〉と指摘しておられる。お二人の問題点の所在が異なることもあり、相反する評価に見えるが、いずれも終末部の、略奪者・乱暴者の為朝像を透視する点は共通している。もし、半井本系統のような本文が、かなり早い段階、原型として存在していたのであれば、こうした乱暴者の性格を更におしひろげる改作が出現することもあったろう。[14] しかし、『保元物語』各系統にその痕跡が窺えないのは、鬼の宝の散佚というくだりが、極端に荒唐無稽なものになることを忌避するためもあろうが、原型に限りなく近い段階では形成されていなかったため、と思量するのである。

勿論、この一事をもって、現在多くの先学が説いておられる〝半井本系統先行〟を覆す意図は小稿にはない。邂逅場面のみでは、宝徳本系統のような、為朝渡島の顛末そのものを欠く系統と、同列に考察できないことが明らかだからである。また、「〜系統本文」と断わってきたように、本稿は、各系統の序列を主眼とするものではなく、現存諸伝本の書写者の奥にいる改作者（同一の場合もあるであろう）たちによる、本文形成の過程を明らかにすることがその目的だからである。

ただし、半井本系統半井本と称される、半井通仙院書写本の転写本（国立公文書館内閣文庫、水府明徳会彰考館、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に所蔵が知られる）に、本稿のような証が認められる以上、犬井善壽氏[15]・原水民樹氏[16]が論証しておられる、彰考館蔵文保本や竜門文庫蔵本との関係をふまえての、半井本そのものの吟味も必要であろう。が、しかし、これはこれで別次元の問題である。ひとまず、併存する『保元物語』諸伝本において、為朝と鬼の末裔との邂逅場面の、改作の振れ幅を考察した次第である。

［注］

1　以下の五系統。名称は先学諸氏により異なるが、各系統の調査の中心に据えた伝本名によって、名称を定めている。
＊半井本系統（文保本系統とも）
＊康豊本系統（鎌倉本系統とも）
＊版行本系統（流布本系統とも）
＊根津本系統（京図本系統とも）
＊宝徳本系統（金刀本系統とも）

2　犬井善壽氏「宝徳本系統『保元物語』本文考―四系列細分と為朝説話追加の問題―」（『峯村文人先生退官記念論集　和歌と中世文学』、昭和52年、東京教育大学中世文学談話会）

3　半井本系統本文は、栃木孝惟氏校注『新日本古典文学大系』（平成4年、岩波書店）所収本による。

4　康豊本系統本文は、水府明徳会彰考館蔵康豊本（松本隆信氏・長谷川端氏編『古典研究会叢書 保元物語下巻』、昭和49年、汲古書院）の影印により、私に濁点・句読点・括弧を付した。

5　版行本系統本文は、永積安明氏・島田勇雄氏校注『日本古典文学大系』（昭和36年、岩波書店）所収の、古活字本の翻刻本文による。

6　根津本系統本文は、根津文庫旧蔵筑波大学附属図書館蔵本により、私に濁点・句読点・括弧を付した。

7　根津本系統は、比較的写本数が多く、前掲注2のように、他系統に為朝説話の追加される例もある。早川厚一氏・弓削繁氏・原水民樹氏編『京都大学附属図書館蔵 保元物語』（昭和57年、和泉書院・和泉古典文庫1）の翻刻本文をはじめ、私の調査できた写本の範囲では、根津本系統としての本来的な本文が（世の末なれば）であることが確認できている。

8　野中哲照氏「『保元物語』の（現在）と為朝渡島譚」（『国文学研究』104、平成3年6月、早稲田大学国文学会）

9　原水民樹氏「京図本系統『保元物語』の本文」（『名古屋大学国語国文学』29、昭和46年12月、名古屋大学国語国文学会）

10　鬼の宝の散佚については、他の文芸作品との関連も含めて、考えなければならないが、本稿の意図する、諸伝本の本文生成と、若干性質の異なる問題であり、不問に付した。後考を俟ちたい。

11　高橋貞一氏『金刀比羅宮蔵保元平治物語とその流伝』（平成7年、和泉書院）一七一頁～一七二頁

12　栃木孝惟氏「半井本保元物語に関する試論―為朝の措かれかたの問題点から―」（『軍記と語り物』4、昭和41年12月、軍記物談話会）

13　麻原美子氏『保元物語』試論―為朝造型の論理をめぐって―」（『軍記と語り物』7、昭和45年4月、軍記物談話会）

14　たとえば、狂言「隠笠」「財のつち」では、為朝が鬼との力競べに勝って宝を得たということか、すっぱによって語られる（寛永一九年大蔵虎明書写『狂言之本』）。また、狂言「首引」は、為朝が鬼が島に渡り、力競べをするところを描く（元禄一三年版『狂言記外五十番』）。諸流、また伝書によって差異はあるが、近世初期には、こうした話が成立していたのである。

15　犬井善壽氏「文保・半井本系統『保元物語』本文考―文保本の本文消去および行間書き入れをめぐって―」（『国語国文』38-2・3、昭和44年2月・3月、京都大学国文学会）

16　原水民樹氏「竜門本『保元物語』本文の一考察―文保本との関連性の面より―」（『国語国文学論集 松村博司教授定年退官記念』、昭和48年、名古屋大学国語国文学会）
同氏「竜門本『保元物語』の古態性をめぐって」（『徳島大学学芸紀要』人文科学24、昭和49年10月、徳島大学教育学部）

（さとう　ともひろ　昭和学院短期大学　専任講師）